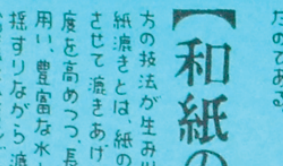
【紙技（かみわざ）】

紙の発明者は、きちんとした記録としては『後漢書』宦者列伝中の三百字足らずの記事によって、元興元（105）年に蔡倫という人によるとの記述があるにすぎない。



和其皇后益封三百戸元初元年卒養子岡嗣関内侯子安嗣後國絕桐帝延熹二年紹封桐曾孫石癩爲關内侯

蔡倫宇敬仲桂陽人也以永平末始給事宮掖建初中小黄門及和帝即位轉中常侍豫參帷幄倫有才學盡心敬慎數犯臘臣頗得失每至休沐輒閉門絕賓客臘田野後加位尚方令永元九年監作秘劾及諸器械莫不精工堅密爲後世法則

（▶『後漢書』列伝第七十八）

しかし、近年では蔡倫の以前に既に前漢の時代から紙状のものが存在していたというのが定説である。さて、中国で発明された紙はゆっくりと拡散してゆく。シルクロードを経て貴重品として東西に渡っていくが、その製造法は秘伝とされ、永く中国だけで独占されていた。

日本へは、『古事記』や『日本書紀』によると、朝鮮半島を経て、4世紀頃には入ってきたらしい。製造術としては、飛鳥時代の610年、高句麗の僧曇徴が初めて紙を漉いたと伝えられている。

一方、シルクロードを西へ行く製紙術がヨーロッパへ渡ったのが、1151年のスペインである。歴史が示すように、西欧人がまた紙を知らなかった奈良・平安の時代から日本は優れた紙の立文化を持っていたのである。

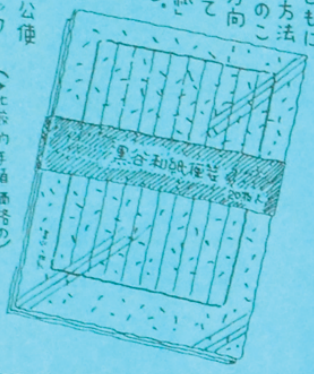
【和紙の誕生】

9世紀から10世紀には「流し漉き」といわれる日本独得の漉き方の技法が生み出された。

紙漉きとは、紙の主原料である植物繊維を水中に分散させて漉きあげることであるが、「流し漉き」とは、水の粘度を高めつつ、長い繊維を持つ楮や三椏といった植物を用い、豊富な水とともに揺すりながら漉く方法（製法は後述）で、このことで、繊維結合の方向が複雑となり、薄くても強く柔軟な「和紙」が誕生したのである。

和紙の優秀さが世界に知れ渡ったのは幕末の開国後である。

初代の駐日イギリス公使ラザフォード・オールコック卿は、ヨーロッパのどこの国の紙よりも丈夫で破れにくい紙「和紙」を文久二（1862）年、ロンドンで開催された万国博覧会に紹介したのである。



（▶比較的手頃価格の「里谷和紙便箋」）

ところで、日本の紙文化こそは、ものを記録したり描いたりするという書画用としての用途を超越して、障子、襖といった建具や、傘、提燈といった生活用具、そして次に示す「のし」に代表される浄化の信仰にまで浸透している。この文化は、機能重視の欧米の考え方とは異なる。日本の風土の中で、豊かな精神生活の営みによって「和紙文化」は鎖国期の江戸時代には頂点に達したといわれている。

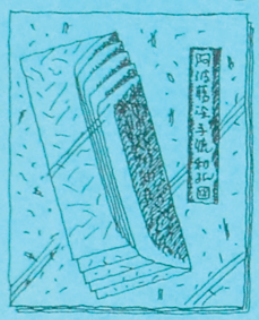
（▶和紙製電気スタンド「霧の光」。色は白・青・ピンクあり。）

【紙は神であった】

紙は適当な硬さがあって、折り曲げが自由である。紙による造形も、日本人の持ち前の器用さと美しさを尊ぶ日本人の行儀作法にもつながって、発達する必然があった。また、紙と神は相通ずるものとして、神聖化された神社の御幣や祝いごとに多く用いられた。紙で包むことによって浄化されるとされた信仰は、いまでも慶弔用の「のし袋」などとして現代にまで及んでいる。この日本独特の美しい風習といえる「のし紙」や「のし袋」の「のし」とは、古代の人が貴重な食品と考え、神様に供えていた鮑（あわび）の肉を薄くはいで乾燥させて保存した鰒斗鮑（のしあわび）のこと。それが、贈り物をするときに清浄なものである印として添えられるようになったのに由来する。

ただ単に物を包むということにとどまらず、その包み方に役割りを持たせたのが「折り形」である。長い年月の間にパターン化され、流派によって多少の違いがあるが、「こんなときにはこうする」という約束事として継承されている。細かい決め事は別として、この包むという行為は、一種の「演出」ともいえるだろう。

昨今の「のし袋」（金銭を入れる祝儀袋）は、さまざまな色や模様の入った紙が主流となり、以前のような真っ白な紙を使うことは少なくなってきたが、折り目正しい質素な「白」の意匠は素敵でもある。



（▶高級「阿波藍染手漉和紙」セット）

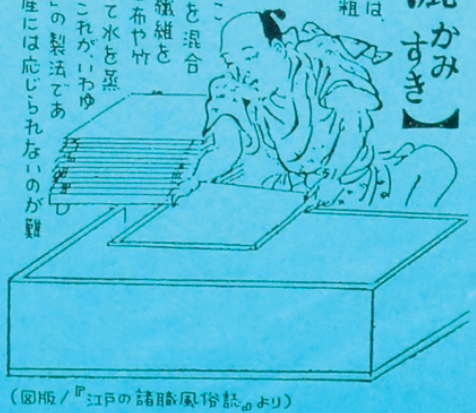
【紙漉（かみすき）】

紙漉きの方法は、楮の皮をはぎ粗皮を取り去り、煮て細かくうち砕いて、繊維を抽出し、雁皮（がんぴ）・雁皮（がんぴ）の根っこから出る粘液を混合した水の中で、繊維をばらし、それを布や竹の簀で掬い上げて水を蒸発させる。――これが、いわゆる「手漉き和紙」の製法である。大量生産には応じられないのが難点である。

伝統工芸的な「和紙」の観点からは賛否があるが、パルプを混入して増量し、機械漉きした「機械和紙」は、安定供給ができ手頃な価格で流通されている。和紙に対しこちらは「洋紙」と称されるのであるが、用途に応じて使い分けさえできれば、工業技術と相乗しあったマスプロダクトの恩恵は大きいと私は考えている。

ところで、日本ではパルプを主原料に機械で量産されている紙を「洋紙」と総称し諸外国の紙をひとまとめにしているが、ネパールやイタリアやフランスにも和紙と肌理は異なるものの「手漉き紙」の伝統はあるらしい。

（「紙すき風俗」はポストカード）



（図版／『江戸の諸職風俗誌』より）

【畳の和室】

現在の日本の住宅は、マンションのみならず一戸建てまでDLDKという間取りの呼称で一般化している。これは日本住宅公団（当時）の51C型標準設計（1951年）、2DKの食寝分離の間取りに起因し、高度経済成長にともなって普及、定着したスタイルである。

LDK（リビングを中心とした炊事室・居間）の概念では、畳の部屋は、多くの分譲マンションがそうであるように、予備的部屋に位置づけられている。20坪ほどのマンションであっても、生活色が割と稀薄な空間となるだけに、また襖、障子、壁紙に……と、建具に多くの紙を使っている和室だけに、部屋の雰囲気にこだわった、和紙の装飾品を吟味したいものである。

（「和紙クペストリー」は6色の品揃え）

（絵と文・富山祥瑞 ⑨ 1986）

株式会社ノア・カワバタ

おかげさまで創業80年感謝祭

期間7／18（木）▶ 7／31（水）

全商品20％OFF（一部の特定商品および特価品は除かせていただきます。）

●さらにメルシー券にて特典がございます。
●その他お買い得商品を盛りだくさんご用意してお待ちしております。
●期間中、博多川端文具カードの特典は除かせていただきます。

博多 川端文具

博多区博多駅中央街1-1 デイトス1F
●博多川端文具 TEL.092-411-8601
●博多川端文具倶楽部 TEL.092-411-5381